Osaka Gakuin University Repository

Title	マリア皇太后日記（1914 ー 1918）について The Diaries of Maria Feodorovna（1914-1918）
Author(s)	広野　好彦 (HIRONO YOSHIHIKO)
Citation	大阪学院大学　国際学論集（INTERNATIONAL STUDIES), 第 32 巻第 1・2 号：1-42
Issue Date	2021.12.31
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

マリア皇太后日記（1914－1918）について

広　野　好　彦

The Diaries of Maria Feodorovna（1914-1918）

HIRONO YOSHIHIKO

ABSTRACT

Maria Feodorovna was the wife of Tsar Alexander III and the mother of Tsar Nicholas II. Her diaries were published as "Married to the Tsar. The Diary of Alexander III's Wife", which contains entries from 1914 to 1918. The title of this work seems a little strange since Alexander III was already gone by this time, and the reign of Nicholas II had begun. However, it was a turbulent period in Russia, namely the First World War, the fall of the Romanov dynasty, and subsequently the socialist revolution.

This article mainly relies on them to describe a history from the perspective of Empress Maria. These diaries contain mainly descriptions of her daily life, her active work as President of the Red Cross, and her life in captivity after the revolution, and not much of political content. Her only active political role during this period was to persuade Nicholas II not to accept the post of Supreme Commander of the Russian Armed Forces at the time when the war situation was unfavorable for Russia. She feared that this decision would not only not be in the best interest of Russia or the Imperial family, but would also be seen as an initiative of Gregory Rasputin. However, her attempts to persuade him failed.

In contrast, contemporaries had high expectations for Empress Maria to play a political role. For example, she was expected to persuade Nicholas II to stop the political intervention of Empress Alexandra and Gregory Rasputin

and to organize a government that would gain the confidence of the Duma. It is true that Empress Maria also felt bitter about the political intervention of Empress Alexandra and Rasputin. She was also hoping that the high-ranking nobles would remonstrate with Nicholas. However, she was reluctant to engage in such activities. Perhaps she felt that she had no influence and did not want her son to suffer.

※はじめに

マリア・フョードロヴナ（Мария Федоровна）は、ロシア皇帝アレクサンドル３世の皇后であり、ニコライ２世の母である[1)]。彼女の日記が『皇帝に嫁して。アレクサンドラ３世の妻、マリア・フョードロヴナロヴナの日記』として公刊されている[2)]。公刊された日記では、1914年２月９日から1918年12月31日まで断続的に記述がなされている。欠落している日付の記述がそもそも初めからなかったのか、何らかの理由で失われたのかについては、基本的には何も語られていない。そもそも日記のテキストに関する情報がない。例えば、日記は全文ロシア語で書かれているが、デンマーク語などからの翻訳である可能性がある[3)]。さらに書名がちぐはぐなのはいただけない。公刊されている日記の時期において、すでにアレクサンドル３世は亡くなり、息子のニコライ２世の治世になっているからである。

それはともかく、この1914年から1918年という時期には非常に興味をひかれる。第一次世界大戦からロシア革命に至る期間に当たっているからで

1）マリア・フョードロヴナはデンマーク出身である。すなわち後に国王となるクリスチャン９世の次女、ダグマール王女として生まれた（1847年）。ちなみに彼女は６人兄弟であり、その中において、兄がデンマーク国王フレゼリク８世、同じく兄ヴィルヘルムがギリシャ国王ゲオルギオス１世、姉アレクサンドラはイギリス国王エドワード７世王妃、妹テューラはハノーファー王太子エルンスト・アウグスト２世妃、末弟ヴァルデマーはデンマーク王子である。

2）Мария Федоровна, Замуж за императора. Дневники жена Александра III, Москва, 2017.　日記の日付は露暦であり、西暦が並置されている。日記引用文中の〔〕の内部は著者注釈である。

3）皇太后がデンマークで亡命者としての余生を送っていた1925年１月、デンマーク外務省は、とあるロシア人実業家が、皇太后の1916年の日記を持っていると主張しているのを知った。その日記は「完璧とは言えないデンマーク語でつづられ、ロシア風の日付と祝日が用いられていた」。駐ソヴィエトのデンマーク外交官は、それを本物と判断した。皇太后の弟、デンマーク王子ヴァルデマーがその全文を読んだが、その内容は、ほとんどが家族、天候、日常的なことの記述で、ほんの10ページ程度がロシアの政治にかかわることであったとされる。ついでながら、結局のところ、この取引は成立しなかったという。Coryne Hall, *Little Mother of Russia. A Biography of the Empress Marie Feodorovna*, London, 1999, p.347.
ちなみに、公刊されている日記の1916年分は、まさにこのようなものである。

ある。無味乾燥なニコライ２世の日記を補うためにも重要であるかもしれない。

ただし、その日記が皇帝日記の補完材料となるかもしれないということは、マリア皇太后がニコライ２世に大きな影響を与えたという意味ではない。マリア皇太后とニコライ２世は、両者の関係が悪いわけではない。マリア皇太后はずっと息子のことを思い続けていたのであるが、種々の事情のために両者は隔絶していたからである。それゆえに、皇太后の日記から窺えるのは、当たり前のことではあるが、マリア皇太后の視点から見た当時のロシアの状況ということになる。もちろん日記はあくまでもマリア皇太后の私的なものであり、そこから当時のパブリックな世界を垣間見ようとするのは限界がある。そこに現れるのは例えば彼女が心配している家庭の問題、あるいは皇太后の恩顧をもともめてくる人々、彼女が熱心におこなった赤十字の活動、革命の混乱の中における拘束された日常生活などである。しかしながら、マリア皇太后は人間的には感情を隠さないタイプであり、それゆえに日記の記述も奔放でその意味でそれ自体興味を引き付けられるものではある。

以下、年代順に皇太后日記を読み解いていく。なおこの小論では基本的に露暦が用いられている。

＊第一次世界大戦の勃発

1914年５月５日から７月19日まで、マリア皇太后はイギリスに滞在している。公式訪問ではなく、実姉のアレクサンドラ王太后を尋ねたものである。日記を見ると、オペラの演目が並んでいる。「ボリス・ゴドノフ（５月19日）」、「ラ・ボエーム（５月13日）」、「マダム・バタフライ（６月６日）」、「フランチェスカ・ダ・ダリミニ（７月９日）」、「アイーダ（７月15日）」など。このように遊興に満ちた日々の記録の中に次のような記載が出てくるのがきわめて象徴的である。

「６月15／28日　お茶を飲んでいるとき、恐ろしい知らせが来た。ボスニアでフランツ・フェルディナンド公爵と彼の妻が殺害された。何とひど

いこと！神の御加護を得て、死ぬとき彼らは一緒であった。…」

「６月30日／７月13日　…８時に帰宅。すべての夕刊は、ラスプーチン暗殺の試みのニュースであふれていた。しかし彼は死なず、とある女性のために負傷した。」

前者は言うまでもなくオーストリアの皇位継承者殺害に関するニュースであり、ロシアを含め欧州の国家を大戦へと向かわせる直接のきっかけとなった。後者は、当時首都から追放され故郷のポクロフスコエ村にいたラスプーチン（Распутин, Григорий Ефимович）に対する暗殺未遂事件である。ラスプーチンは自宅付近で、ヒオニア・グセヴァヤ（Гусева, Хиония Кузьминична）に短刀で腹部を刺された。瀕死の重傷を負ったが死はまぬかれた。犯行の原因は、彼女の友達に対してあるまじき行為をおこなったラスプーチンへの報復であるという。この悪評高い被害者はロシア皇室に取り入り、その名誉を汚し、ロシアの国内的混乱の一因になる。そして大戦とラスプーチンは結合してロシア革命へと至る。

このような中、駐英露大使ベンケンドルフ（Бенкендорф, Александр Константинович）は皇太后に対して帰国を勧告する。

「７月11／24日　ジーナ〔ジナイダ・ゲオルギエヴナ・メングデン、皇太后のお付き〕とともに散歩に出た。セントジェームズ公園に行った。強風。そこでベンケンドルフに会った。オーストリアとセルビアにおける状況に関して、非常に不安な知らせが届く。彼は、私は直ぐに発つ必要があると考えている。当地においても状況はなべて悪い。」

「７月16／29日　迫りくる戦争の恐ろしい知らせがひどく不安にするので、家にとどまらざるを得ない。…７時にベンケンドルフが現れる。彼は私に去ることを求める。しかもできるだけ早く。」

ただ皇太后には退去にあたり考慮するべき家庭的問題があった。息子ミハイル・アレクサンドロヴィチ（Михайл Александрович）のことである。彼は1912年10月、ウィーンにおいて、２度の離婚歴のあるナタリア（Шереметьевская, Наталия Сергеевна）と貴賤結婚を秘密裏に強行していた。そのためにニコライ２世の怒りをかい、ミハイルはロシア帰国を禁じられ、公職勤務からの解職、あらゆる称号はく奪、資産に対しては保護

が設定されるという状態であった。この時期、ミハイルは家族を連れて、ロンドンに来ていたのであった。

「７月17／30日　12時にミーシャ〔ミハイル・アレクサンドロヴィチ〕が来た。私たちは少し散歩をした。私は彼に対して、まさに今、この重大な瞬間に私と一緒に帰宅することを懇願した。彼にとっては今がもっともよい決断であろう。遺憾ながら、いかなる結果も私は得られなかった。」

皇太后は帰国を促されているのに乗じてミハイルをも帰国させようと計画するが、当のミハイルに拒否される。ただし、断固拒否というのではなく、急な話のために決断がつかなかったというのが実情であろう。

７月19日、皇太后はイギリスを発ち、フランスとドイツ経由で帰国する予定であった。しかしベルリンで、ドイツ通過を拒否される。独露間で宣戦布告がなされたからである。ドイツ嫌いの皇太后は次のように記述している。

「７月20日／８月２日　フランスでは至るところで『ロシア万歳！』の叫び声で迎えられた。動員は全力でおこなわれていた。ドイツでは、私たちがベルリンの近郊に到着するまで、何も気が付かれなかった。ベルリン近郊では通りの人々が憎しみを発散させていた。私たちがベルリンに入ったとき（いやらしい場所である）、列車にセルビア人が現れ、宣戦布告されたこと、また私がドイツ国境を横切ることは許されないことが知らされた。」

皇太后はやむなく、デンマーク、スウェーデン、フィンランド経由で、７月27日にペテルゴーフに到着している。ちなみに７月21日、皇太后がまだデンマークにいた時に、アレクサンドラ王太后からイギリスが連合国側に立って参戦するという電報を受け取り、「何と大きな喜び」と叫び、周囲のものと抱き合った。他方、ミハイルは８月11日に帰国した。皇太后の計らいでニコライ２世と再会する。

「８月11／24日　ひどい興奮。本日、私のミーシャを待っていた。…お茶のために帰宅。そこにはまたニッキー〔ニコライ２世〕と２人の小さな娘がいた。かくして、ニッキーとミーシャは、ここ私のところで初めて会うことになった。彼らのこの再会は私にはとても感動的であった。ミー

シャは泣き出した。しかしすぐに彼ら両者は感情を自己の中で抑制し、それについては言及しなかった。」

こののち、ニコライ２世はミハイル大公を許し、彼の地位などを回復し、ミハイルは健康の許す限り軍務につく。彼の夫人には貴族の称号があたえられたが、皇族の集まりに加わることは許されなかった。

※大戦における銃後の活動

第一次世界大戦下のロシアでは、以前の戦争と同様に、皇族や貴族の女性は銃後で種々の形式で戦争を支えていた。皇太后の次女オリガ・アレクサンドロヴナ（Ольга Александровна）は看護師として前線に向かうことを志願する。皇太后はオリガの行動を理解すると同時に不安を覚えている。皇太后はオリガを自分の手元に留めておきたかったと思われる。

「７月28日／８月10日　私のオリガが言った。数日後彼女は福音部隊とともに、看護師として前線に向かうと。これは私には理解できた。しかしそれとともにこの考えは私を脅かした。」

「８月２／15日　私の愛するベイビー・オリガとの別れという悲しい瞬間が到来した。彼女は福音部隊とともに発つ。何と悲しいことであろうか！しかし、私たちの高貴で英雄的な兵士の世話をするという大きな願いに私は共感する。」

皇太后の銃後の貢献に関しては、何よりもロシア赤十字の総裁としての仕事があった。日記には、これに関係して、連日のように記載されている。例えば、前線に向かう部隊に対する引見。病院における負傷者の見舞い。自らの銃後救援組織（病院列車や倉庫）の管理などである。赤十字の代表として皇太后はウラジーミル・スホムリノフ（Сухомлинов, Владимир Александрович）陸相に対して陸軍の欠けるところを赤十字が代替するとの提言すら行っている。

「８月14／27日　午前中ずっと客の応接。最初はスホムリノフ陸相。私たちの赤十字派遣隊が前線に向かうことが許されていないが、軍には実際のところ負傷者サービスが何もないことを彼に知らせた。」

戦争に関する厳しい現実も日記に反映され、ロシアにとってはかばかしくない戦果が記される。

「8月19日／9月31日　前線からの厳しい知らせ。東プロシアで恐るべき敗北を被った。3人の将軍が死亡。その中には私の愛しいサムソノフがいる！何と恐るべきこと！…私は完全な絶望状態にある！」

上記はいわゆるタンネンベルク会戦におけるロシアの敗北である。第2軍司令官アレクサンドル・サムソノフ（Самсонов, Александр Васильевич）将軍死去の報に皇太后は絶望状態である。さらには戦争の被害が皇太后の身近なものに及ぶ。1914年8月、東プロシアにおいて、皇太后が親しく交際していたオレグ・コンスタンチノヴィチ（Олег Константинович）大公が、瀕死の傷を負った。その報を聞きつけて、両親が前線へと赴く様子が記されている。

「9月28日／10月11日　かわいそうなオレグは重傷。コースチャ〔コンスタンティン・コンスタンティノヴィチ〕とマヴラ〔エリザヴェータ・マヴリキエヴナ〕は、ヴィルナの彼のところに行った。」

「9月29日／10月12日　昨夜かわいそうで愛らしいオレグが亡くなった。彼はそれでも、不幸な両親に会うことができ、聖職者のもとで告解することができた。何と恐るべき悲しみ！」

また日記には赤十字総裁としての皇太后が尽力した、交戦国の看護師による捕虜収容所相互視察の取り組みに関する記述がある。例えば、中立国のデンマーク赤十字関係者が、ドイツ赤十字関係者を伴い、シベリアの捕虜収容所を視察した帰途に皇太后を表敬訪問した記述がある。ここには皇太后のドイツ嫌いがにおっている。

「1915年1月2／15日　正餐の後でデンマークの紳士メイエルとムウウスに会った。彼らはシベリアに行って来た。そしてドイツの婦人と会った。ムウウスは感じがよく、愛想がよい老人。彼が体験したすべてのことを語った。捕虜に関しては人道的に扱われているが、食事が不十分であると考えていた。この後私はドイツの婦人ケッセ・スタクールとパソフを引見した。しかしこれは私にとっては非常に不愉快であった。フランス語で話がおこなわれた。すべては十分素晴らしくおこなわれた。」

交戦国看護師の捕虜収容所視察は些末なトラブルを引き起こすこともあったようだ。例えば、ロシア赤十字がドイツ看護師の視察を妨害したという愚行に対して、皇太后は赤十字関係者に対して改善を求めている。

「６月２／15日　素晴らしい天気。10時30分、イヴァニツキー〔ボリス・エヴゲニエヴィチ、南西方面におけるロシア赤十字全権〕を引見。彼に次のことを話す。赤十字は、デンマーク代表と看護師の捕虜収容所訪問を妨げようとして、恐るべき愚かなふるまいをした。それで代表は、イリーン〔アレクセイ・アレクセエヴィチ、ロシア赤十字社幹部〕のところに戻る決定を急遽行った。彼にこれを修正することを命じるためである。」

ロシアは大戦において負けていたばかりではない。オーストリアとの南西方面において、ペレムィシュリ要塞を陥落させた（1915年３月９日）。４月上旬、南西方面の状況は良好と思われた。ロシア軍はガリツィアとブコヴィナの三分の二を占領し、カルパチア山脈を領有した。これを背景として、ニコライ２世自身が、ペレムィシュリ（４月10日）とルィヴォフ（４月11日）を訪問した。そこでは彼を数千人の人々が迎えた。他方、ロシア国内では、これを機に愛国主義であふれた。皇太后は、ペトログラードにおける熱狂を記している。

「３月10／23日　都市全体がペレムィシュリ陥落を祝していた。そりでエヴゲニー〔・オリデンブルグスカヤ、アレクサンドル・ペトロヴィチ公爵の妻〕のところに行った。通りは、歌ったり、『ウラ』と叫ぶ人で黒山の人だかり。一日中深夜まで、数千の人々が、歌いながらまた『ウラ』と叫びながら脇を通っていた。」

だが４月18日の夜、独墺軍の積極的攻撃が始まった。ドナウ川戦線では、ロシア軍の砲の準備が独墺軍に著しく劣ったために、戦線が破れ、５月初旬には、ロシア軍はサン川のラインに退却を余儀なくされた。５月８日の夜にペレムィシュリは放棄され、５月27日、オーストリア軍は、ルィヴォフを占領した。かくして、ひと月の間で、それまでの戦争の果実が失われた。

この時期、講和活動の痕跡が日記に見える。東アジア会社社長アンデルセン（Andersen, Hans Niels）が、マリア皇太后の甥にあたるデンマーク

国王クリスチャン10世の支持のもと、イギリス、ドイツ、ロシアを訪問している。その関連で彼は皇太后を表敬訪問している。

「７月６／19日　午前中は比較的自由、素晴らしい天気。12時に私の忠実なアンデルセンが来た。大きな喜び。なぜならばあらゆる人とあらゆることについて再び聞くことができるから。正餐までとどまった。講和締結が必要であると考えている。激しい大虐殺。言語道断である。私は次のように答えた。私たちは戦争を望んでいない。しかし私たちは今講和について語ることはできないと。彼は最初にイギリスに行き、二度ジョージ〔英国王ジョージ５世〕に会い、自分の印象に非常に満足している。当然であるが、アリックス〔英国アレクサンドラ王太后〕に会い、多くの興味深いことを話しした。」

「７月８／21日　…12時に愛想のよいアンデルセンが来て、正餐までとどまった。…フランス人の捕虜収容所で２時間カイザーといかにすごしたかというアンデルセンの話を聞くのは非常に興味深かった。カイザーの演説を聞いたが、彼は自己をほとんど半ば神のように思っている。彼は、誇大妄想に苦しんでいる狂人であるに違いない。全能であると信じている。私に宛てて挨拶をあえて送るとは、良心のない家畜のようである！アンデルセンは今夜出発する。それゆえに私は一日中庭でヴァルデマー〔皇太后の弟、デンマーク王子〕に対する書簡を書いていた。」

これに関しては、ニコライ日記には、７月８日に「アンデルセンを引見」という簡素な記録だけがある[4)]。ところで、マリア皇太后は、アンデルセンの講和活動に対して明確に否定している。「私たちは戦争を望んでいない。しかし私たちは今講和について語ることはできない」と。皇太后は戦争に関して不安を感じていても、ドイツと和を結ぶことは考えられないのである。アンデルセンの訪問は実を結ばなかった。

4）Дневники Императора Николая II, М., 1991, стр.537.

※ニコライ２世の軍総司令官就任

ニコライ２世は、開戦当初は軍総司令官に就任する意向をあらわにしたが、周囲の説得に応じてあきらめた。彼は戦争に真面目に立ち向かい、総司令部や前線に行き、派遣された部隊の閲兵をおこなうにとどめた。軍事作戦の指揮は総司令官となったニコライ・ニコラエヴィチ（Николай Николаевич）大公の掌中にあった。他方皇后アレクサンドラ・フョードロヴナ（Александра Федоровна）は、ニコライ大公が、総司令部において、君主のような態度をとっていることを何度も夫に注意をして、夫が総司令官になるように助言している。ニコライ大公は、この時点ではラスプーチンに批判的になっていた。しかしニコライ２世は、司令官を信頼し、軍事作戦指導への積極的な介入はしなかった。それはともかくも、この件についての皇太后の日記には次のような記述がある。

「８月８／21日　パーヴェル・ベンケンドルフ〔国家評議会議員〕がしばらくぶりに私を訪問した。私たち二人は、戦線からの知らせと、巷間語られていることについて失望している。何よりも、悪人グリゴリー〔ラスプーチン〕が戻ってきたことと、またA.〔アレクサンドラ皇后〕が、ニコライ・ニコラエヴィチ大公に代わり、ニッキーが総司令官を引き受けることを望んでいることである。これを望むとは理性を失っているに違いない！」

ラスプーチンは、1914年秋にペトログラードに帰還していた。1915年初頭、アレクサンドラ皇后のお付きのアンナ・ヴィルボヴァ（Вырубова, Анна）が列車事故のために瀕死の重傷を負ったとき、皇后に呼ばれてヴィルボヴァの心を鎮めた。彼女は、ラスプーチンの「予言」通り、障害は残ったが、生きながらえることができた。これを契機にまたラスプーチンは、皇室の中に入り込んでいたのである。皇太后がラスプーチンをよく思っていなかったことは、1915年９月16日付のアレクサンドラ皇后のニコライ２世に対する次のような書簡から明らかである。

「エラギン〔マリア皇太后邸〕では、ガドン〔ウラジミル・セルゲエヴィチ、赤十字関係者〕が悪い役割を果たしているのではないかと心配してい

ます。なぜならばそこでは、私たちの友人〔ラスプーチン〕に反対する会話がひどいそうです。…かわいそうなお母様にお会いしたら、中傷に耳を傾け、それをやめないことが、どれほどあなたを苦しめているのかをきっぱりと言わなければなりません。そのことにより不和が生じますし、お母様を私と対立させることを、他人はきっと喜んでいるのでしょう。なんていやらしいのでしょう[5)]。」

ニコライ２世自身は、軍総司令官を引き受ける件について皇太后のところに、皇后を連れずに、娘だけを連れて説明に来ている。

「８月12／25日　ニッキーは、４人の娘を連れて来た。彼は自ら話し始めた。ニコラーシャ〔ニコライ・ニコラエヴィチ大公〕に代わって司令を引き受けると。私はひどく驚いたので、ほとんど卒中が起こりそうであった。これは大きな間違いであると私は言い、特にすべてが私たちにとって悪い今、これをおこなわないようにと懇願し、次のように付言した。これをおこなえば、これはラスプーチンの命令であると皆は見ますと。これは彼に影響を与えたと思う。なぜならば彼はひどく赤面したからである。彼は、このことが私たちと我が国に対していかなる危険と不幸をもたらしうるのかを全く理解していない。」

総司令官交代はラスプーチンの命令とみられるとの皇太后の批判も、ニコライの感情は揺さぶったが、彼の決心を変えるまでではなかった。なおこの日のニコライ日記の記述から皇帝の感情は見えない。「８月12日　２時半に娘たちと町に出て、エラギンのママのところに行った。ママ、クセニア、オリガ［それぞれニコライ２世の妹］と散歩した。茶を喫し、６時に帰った。執務をした[6)]」。

皇太后は総司令官を引き受けないようにとニコライに説得するために、ツァールスコエ・セローにまで出向いた。ニコライ２世に対する諫言に皇太后がここまで積極的になるのは、大戦期においては極めて珍しい。しかしそれも効果をもたらさなかったようだ。

5）Joseph T. Fuhrman（ed.）, *The Complete Wartime Correspondence of Tsar Nicholas II and the Empress Alexandra. April 1914 - March 1917,* London, 1999, p.478.

6）Дневники Императора Николая II, стр.543.

「８月18／31日　３時45分、クセニアと私はツァールスコエに行き、もう一度運を試す。ニッキーはクロンシュタットに行き、ようやく７時に帰宅。私たちはアリッキー〔アレクサンドラ皇后〕のところで喫茶。彼女は、私を不安させることを除いて、すべてのことについて語った。彼女らと話をすることはできた。しかし結果が出なかった。９時に帰宅。」

「８月20日／９月２日　アレックはモギリョフから戻って来た。ドミトリー・パーヴロヴィチを連れてきた。まだ何かすることができるのかもしれない。私たちは少し庭を散歩した。その後男の子たちがやって来て、ニコラーシャの評価について話をした。彼に手を触れるのはいかに危険であるか。皆が彼に強く信頼を寄せているということである。お茶までとどまった。やりきれない状況。」

当時総司令部のあったモギリョフから戻ったアレック（・オリデンブルグスキー公爵、皇太后の娘オリガの義父）は、衛生後送部隊の司令官である。彼が連れてきた、ドミトリー・パーヴロヴィチ大公たちが、軍総司令官であったニコライ大公の評釈をする。「皆が彼に強く信頼を寄せている」ということを聞き、皇太后はやり切れない状況となる。

ニコライ２世は、総司令部に出発前に皇后とともに、皇太后のところに別れのあいさつに来た。皇太后は今一度総司令官就任を思いとどまるよう懇請する。

「８月21日／９月３日　今や、私たちは、またグロドノをも放棄した。全く非常に悲しい。非常に抑圧されたように感じる。正餐にニッキーと妻が来た。彼女は私のところに来るのは１年ぶりである。私は今一度総司令官をそのままとすることをニッキーに求めた。遺憾ながら、おそらくはうまくいかないであろう。彼は素晴らしく、意気揚々とした状態である。私には理解できない。それから私は彼と別れの挨拶をした、彼は明日出立する。」

皇太后は、ニコライの意気高揚した様子を理解できないと嘆く。ニコライ日記の記述は例によってそっけない。「８月21日　…その後11時半に、アリックス〔アレクサンドラ皇后〕と町に行った。救済者礼拝堂と要塞で祈るために立ち寄った。エラギンでママとクセニアとともに昼食。彼女ら

と別れのあいさつをした[7)]」。

8月23日、皇太后は、オルロフ（Орлов, Владимир Николаевич）中将（皇帝の軍事野戦官房長）が更迭されたことをコマロフ（Комаров, Владимир Александрович）中将（ペトログラード宮廷管理部長官）から聞く。皇太后は、「全く途方もない！このような彼に忠実で献身的な友人を」と嘆く。オルロフはニコライに忠実で献身的な友人あるがゆえに、ラスプーチンの影響力に批判的であったのだ。

「8月28日／9月10日　素晴らしいオルロフに会った。彼はすでに、遺憾ながら、ニッキーの傍にいない。非常に残念。献身的で忠実な人間という点でまれである。私は、彼がニッキーとともにいるとき非常に喜んだのであった。彼にはとても心を打たれ、すべてを正しくそして素晴らしく理解している。もっとも何らの説明もなしに彼が退けられたことに深く傷ついているが。しかしこれは彼〔ニコライ2世〕の意思ではなく、彼女〔アレクサンドラ皇后〕のあらゆるものに対する不正常な感じ方である。…」

皇太后の判断によれば、オルロフ解任は、皇帝の意思ではなく、皇后の不正常な感じ方に由来するのであった。

※1916年

皇太后の日記は基本的な私的なことがつづられているが、時たま政治や軍事に関する記述がみられる。例えば1916年初頭の次のような政変の記述がある。

7）Дневники Императора Николая II, стр.544.　なお、ニコライ大公が5月からのドイツとオーストリアの攻勢のために精神的にボロボロになっていたことは、皇太后らには知られていなかった。
1915年5月11日、総司令部訪問後、ニコライ2世はアレクサンドラ皇后に次のように書いた。「私は、このような重大な状況において、ここから去ることができましょうか。私は、重大な瞬間に軍とともに残ることを避けたと理解されましょう。かわいそうなN.〔ニコライ・ニコラエヴィチ大公〕は…自分の書斎で泣きました。そして私に対して、彼をより能力のある人物にとってかえることを考えるように求めました。…彼は私を抱擁し、私がここにとどまったことを感謝しました。私の存在が彼自身を落ち着かせたからです。」（Ibid, P.132）

「１月20日／２月２日　ついにクセニアを訪問する。そこでセルゲイ・ミハイロヴィチ〔大公〕に会った。彼は、年取ったずるがしこいゴレムイキン〔首相〕が辞職すると述べた。彼の代わりに、シテュルメルが任命された。奇妙な選択。」

首相にシテュルメル（Штюрмер, Борис Владимирович）が任命されたという記述に、皇太后は「奇妙な選択」という評価を加えている。当時のロシアにおけるドイツ・ヒステリー的状況の中で、ドイツ風の姓名を持つものが選ばれたこと、またその選任にはアレクサンドラ皇后とそれを支えているラスプーチンの影響があるとうわさされたことなどが、その理由と考えられる。

ところで、ニコライ２世は軍の総司令官となり、前線に滞在することが多くなったが、首都に帰還した際に、冷淡な態度をとり続けていたドゥーマの開会式、ならびにアナトリア半島におけるエルゼルム奪取に関する祈祷に臨んだことが以下の記述からみられる。戦時における挙国一致がもくろまれたのである。

「２月９／22日　その後ニッキーが来た。彼はドゥーマ開会に際しての祈祷に出席した。明日彼は出発する。お茶には５時半にようやくミーシャが来た、彼もまたドゥーマ開会に行き、会議の最後までいた。」

駐露仏大使モーリス・パレオローグ（Paleologue, Maurice）は、この日、ドゥーマ開会に際して祈祷がなされたときの議場の雰囲気を次のように記述している。

「議場ではものすごく雰囲気が高揚した。反動派、無制限の専制支持者は、怒りと失望に満ちた視線を交わした。ツァーリ兼神聖な君主が、神聖破壊をおこなっているかのようである。左派は、これに対して荒々しいものすごい喜びにあふれていた。多くのものには目に涙を浮かべた[8)]。」

前記のシテュルメルは、首相のほかに内相も兼務したことを皇太后は記す。「３月８日／21日　シテュルメルは今や内相である。フヴォストフが辞職」。あまり細かい人事は日記に記載されないのが常なのだが、皇太后

8）Морис Палеолог, Царская Россия накануне революции, М., 1991, стр.36.

の見るところ「奇妙な選択」だから記載されるのだろう。なおシテュルメルは、のちにサゾノフ（Сазонов, Сергей Дмитриевич）の代わりに外相も兼摂することになる。これに対して皇太后は、きわめてあからさまに「外相ポストに対する不首尾な候補者（７月10日／23日）」と断じている。

※キエフへの移住

皇太后は、1914年夏ロシアに帰国以来ペトログラードのエラギン宮殿、のちにアニチコフ宮殿に住んでいた。1915年には６月初旬からキエフに行き、２週間ほど滞在している。娘のオリガが首都よりも前線に近いキエフで病院を経営し、看護師として働いていたので、彼女の働きぶりを観察に来たのである。また1916年５月１日夜10時半、皇太后らはペトログラードを出発し、３日午後２時半にキエフに到着している。そして皇太后はこの後決して首都に戻ることはなかった。

なぜ皇太后がキエフに移ったのかの理由は、日記には明示されていない。推測すれば、皇太后は前線に近いキエフの方が、赤十字活動などにおいて有用なことができると考えたということ。娘のオリガが活動をしていた場所であるというのも大きな理由であろう。さらにはペトログラードにおけるラスプーチンに関する噂に関して嫌悪を催し、首都を離れたのであろう。

日記からは皇太后が赤十字関係の仕事を継続していたことも見て取れる。具体的内容を持つものを引用しよう。

例えば、デンマーク人将校とともに捕虜収容施設を視察したドイツ人看護師がスパイの嫌疑を受けてしまったこと。

「９月15／28日　その後、クロムジン〔アナトリー・ニコラエヴィチ、国会評議会議長〕と２人のデンマーク人陸軍大尉ヴリフとクレブス博士を引見。後者は、近衛中尉の称号も持つ。ロシアに関する出張について話をした。ヴリフは、ドイツ人看護師と一緒に行った。彼女は、捕虜に手紙を伝え、そして彼らから送るための手紙を受け取ったと、虚偽の嫌疑を受けている。彼女らは、まさに間諜のように扱われていた。全くの混乱。」

デンマーク人医師からロシアの捕虜の取り扱いの素晴らしいとほめられたことも記されている。

「10月６／19日　非常に素晴らしい若いデンマーク人医師マルティニを引見した。彼は、ロシアにいる捕虜のために医療品を持ってきたのである。きわめて興味深く話をした。捕虜に関しては、当地においては非常に良く扱われていると彼は考えている。」

またドイツにおけるロシア人捕虜収容所の視察に関する記載もある。

「11月27日／12月13日　午後２時に６人の看護師を引見。彼女らは、ドイツにおける私たちの不幸な捕虜を訪問した。これは、サムソノヴァ女史、プーシキナ、侯爵夫人ゴリツィナ、クリューエヴァ、デ・ヴィット、シューベルト、ヒルコヴァの娘。彼女らのうちの２人は、自らの不幸な夫と会った。非常に興味深い会見。しかし全て非常に悲劇的であった。」

もちろんこれ以外にもキエフにおける皇太后の病院の視察の記述は日記においては事欠かない。

戦争の経緯に関して、キエフ滞在時における皇太后の日記には明るい記述が目立つ。1916年２月、南西方面総司令官に就いたブルシーロフ（Брусилов, Алексей Алексеевич）将軍のもとにおける攻勢にかかわるものである。ロシア軍がオーストリア軍の防衛線を突破したのである。

「５月23日／６月５日　昼食後シェルヴァシゼ〔ゲオルギー・ドミトリエヴィチ、皇太后の家政管理者〕は、私たちの軍がルーマニア国境で敵を撃破し、13,000人の捕虜を確保したと知らせた。」

「５月26日／６月８日　神の御加護を得て、ブルシーロフ軍団に関する素晴らしい知らせ。」

「５月29日／６月11日　神の御加護を得て、前線から良い知らせが来る。」

「６月５／18日　さらに一つ輝かしい勝利が得られた。多くの捕虜が得られた。主へ感謝。」

「７月15／28日　私のところでサンドロ〔アレクサンドル・ミハイロヴィチ、娘クセニアの夫〕が正餐をとり、彼は私たちの偉大な勝利の知らせをもたらした。主に栄光と感謝！」

７月22日は、皇太后が主催して、戦勝感謝の宴がおこなわれている。

「７月22日／８月４日　10時半に、ニッキーからの手紙を持ったエリストフを引見。祝祭の広間は祝賀のためにキエフがすべて集まっていた。クセニアが来て、私たちは、イグナティエフの教会に感謝祈祷に行った。この後、私により、祝典の昼食がおこなわれ、それには数人の近衛重騎兵が参加した。ズヴェギンツォフ、飛行士ヴォエヴォドスキー、２人－チュグエフスキー連隊から、３人－近衛海兵団から。ブクスゲヴデン、フォゲリ、エリス。すべては非常にうまくおこなわれた。」

※娘オリガの離婚と再婚

ブルシーロフ攻勢が終わる1916年秋に、皇太后自身にとって重大な家庭的問題、すなわち次女オリガの離婚と再婚が現実味を帯びる。

「９月20日／10月３日　少しアプラクスィナ〔オボレンスカヤ公爵夫人〕とドライブに出た、ことのついでに私のベイビー〔オリガ〕についての話があった。彼女は離婚するつもりであり、これに対して完全な権利がある。しかし私にはこの話は重苦しく、不愉快である。」

そしてその翌日には新聞においてこの問題が取り上げられている。

「９月21日／10月４日　新聞においてベイビーの離婚に関する文書を読み、ものすごい衝撃を感じた。このようなものがどうして公開されるのか?!」

皇太后の驚きはものすごいが、ここにおいて皇族のゴシップがあからさまに新聞に出るところから、検閲の緩みが見て取れる。

すでにこの年の春にオリガは離婚する意向を皇太后に打ち明けている。さらに皇太后はオリガの夫であるオリデンブルグスキー（Ольденбургский, Петр Александрович）公爵にもオリガの意向を伝えていた。

「４月８／21日　ペーチャ〔ピョートル・オリデンブルグスキー公爵〕が昼食に来た。私たちは初めて率直に話をし、彼は泣いた。そのために私はとても無様な状況に陥った。」

オリガは皇太后の勧めで、1901年、オリデンブルグスキー公爵と結婚し

た。両者には子供はなく、結婚関係はうまくいかなかった。皇太后は承知していなかったが、オリデンブルグスキー公爵はゲイであった[9)]。

夫婦関係がうまくいかないオリガは、夫の副官であった近衛槍騎兵連隊の将校ニコライ・アレクサンドロヴィチ・クリコフスキー（Куликовский, Николай Александрович）と恋に落ちた。オリガは、離婚について直ちに提起した。しかし皇帝ニコライ２世は、判断を延期することを指示していたのであった。

1916年11月４日、キエフにおいて、オリガとクリコフスキーの結婚式がおこなわれた。皇太后は非公式に参加するという形をとった。貴賤結婚ではあるが、オリガの決断を尊重するという意味である。

「11月４／17日　愛らしいベイビーは恐ろしく興奮している、サンドロが来て、私たちが彼女の結婚式に立ち会うときは教会の中で私たちが気づかれないようにする必要があるととりきめた。午後４時半まで家にとどまり、その後サンドロのところに向かった。そこではすぐにお茶を喫し、その後オリガとタチアナ・アンドレエヴナのところに行った。彼女らを教会に送るためである。そこには局外者の誰もいなかった。オリガは白いドレスを着て、冠をつけベールをかけていた。幸せそうな顔であった。２人の将校とプンカが婚礼介添人の役割であった。すべては全くあり得なかった。神よ、彼女を祝福し、彼女が愛するものを本当に幸福にしたまえ。すべてのスタッフは、愛情と情熱をもって彼女を迎えた。その後私たちは一緒に話をした。至る所に興奮と喜びが支配していた。」

同じ時期、皇太后がロシアに来て50周年という記念の節目が到来している。50年前、皇太后はロシア正教に改宗した。「10月12／25日　本日は私の聖油式から50周年、宗務院から電報を得た。」という記述がある。これ

9）彼がゲイであるという噂は流れていたが、皇太后は信じなかったようだ。日記によれば、1918年に初めて彼女はそのことに得心している。「1918年７月20日／８月２日　金曜日いつものように、午前中にクセニアとオリガが来た。オリガは、ペーチャの振る舞いに関するありえないことについて話をした。たとえ彼女が以前に彼と離婚をしていなくとも、今は彼女にはそうする動機があるであろうと。彼は、最新流行のゆがんだ関係のものすごい信奉者と交際をしているのである。何と恐ろしいこと！」

に際して、皇太后が式典を行った記述も見える。

「10月19日／11月１日　すでに午前10時にブルシーロフ将軍とイヴァノフ〔ニコライ・ユードヴィチ〕将軍を引見。彼らも私の記念日祝祭に参加する希望を表明した。その後ブルイギン〔アレクサンドル・グリゴリエヴィチ、前内相〕と〔テキスト空白〕公爵が来て、彼らはニッキーの詔書を読み上げ、ローマ数字“L”のついた勲章を手交した。非常に美しい。その後私は広間で祝辞と贈り物を持っているすべてのものを引見し、このことに非常に感動した。」

この際にキエフに集ったロマノフ一族の中から体制の危機、「革命の入り口」という言葉が語られたことが見受けられる。

「11月９／22日　その後ゲオルギー〔・ミハイロヴィチ大公〕が来て、彼とお昼に多くのことを議論。彼は状況を極めて暗く見ていて、私たちは革命の入り口にいると述べた。人心が憤激し、他方信頼が失われたからであると。きっと、ニッキーの４人との会話が彼の目を見開かせ、果実をもたらすであろう。アレクセーエフ〔ミハイル・ヴァシーリエヴィチ、総司令部参謀長〕、シャヴェリスキー〔ゲオルギー・イヴァノヴィチ、総司令部付首司祭〕、ニコライ〔・ミハイロヴィチ大公〕、最後にニコラーシャ。…彼らは彼［ニコライ２世］にあらゆる真実を語ったのだ。主よ、彼を助けたまえ！彼だけを私たちは期待することができるだけである！」

その翌日、ニコライ・ミハイロヴィチ大公は、皇太后に対してニコライ２世への諫言を率直に話し始めた。「彼が私のかわいそうなニッキーに語ったすべてを聞くのは恐るべきことである。」と皇太后は記す。ただし、ニコライ・ミハイロヴィチ大公が何を語ったかは詳述されないが、次のことは知られている。

これより先、11月１日、ニコライ・ミハイロヴィチ大公は、モギリョフの総司令部でニコライ２世と談話している。ニコライ日記には次のように簡潔に記されている。「正餐後、私のところで、ニコライ・ミハイロヴィチが長くとどまった[10)]」。翌日、ニコライ２世は、ツァールスコエ・セ

10）Дневники Императора Николая II, стр.610.

ローにいるアレクサンドラ皇后に対して次のように書いた。「ニコライ・ミハイロヴィチがやって来た。昨晩私たちは、長く話をした。そのことについて次の手紙で君に知らせよう。今日は時間がない[11]」。そしてニコライ２世は受け取った２通の書簡を皇后に送った。11月４日、皇后はニコライ２世に宛てて書簡を送り、ニコライ大公の書簡を「侮辱的」と断じ、「彼は追放されるべきです。どうして彼はあなたに対して、私に反対するようにと言えるのか。馬鹿らしく、卑怯」と怒りをぶちまけた[12]。ニコライ大公の書簡は、革命の近いことを述べ、皇后がそれを挑発していること、そしてドゥーマから信頼される人物に政治をゆだねることを進言したものであった。即日、ニコライ２世は、皇后に対して謝る。「自分で書簡を読まずに、送付したのは悪かった」と[13]。おそらくは、ニコライ２世は、皇后に対して批判的言説を伝えて、少なくとも問題の所在を理解することを求めようとしたのであろうが、この試みは失敗した。

※ラスプーチンの殺害

1916年12月17日の早朝、アレクサンドラ皇后の影で政治をコントロールしていると言われるラスプーチンが、皇太后の孫娘の夫にあたるフェリックス・ユスポフ（Юсупов, Феликс Феликсович）公爵のモイカ宮殿（ペトログラード）で殺害された。この件は、皇太后の日記には次のように即日反映されている。

「12月17／30日　その後、国家ドゥーマ議員［テキスト空白］。ペテルブルクから直接来たが、きわめて喜ばしくない様子である。すべては非常に悲しく、将来のために非常に危険な結果に至るかもしれない。まさに正餐の前に、ラスプーチンが殺されたかのような噂が広まった。これが本当とは信じることができない。」

11）*The Complete Wartime Correspondence of Tsar Nicholas II and the Empress Alexandra,* p.1548.
12）Ibid, p.1555.
13）Ibid, p.1558.

名前が明らかではないドゥーマ議員がもたらした首都の状況の中にラスプーチン殺害云々があったのかどうかはわからない。しかし犯行当日午後には、ラスプーチン殺害の噂はキエフに達していた。この記述には記されていないが、それにはフェリックス・ユスポフ公爵さらに皇族の一員であるドミトリー・パーヴロヴィチ（Дмитрий Павлович）大公が関与していたのであった。犯行を行ったフェリックスは、キエフの皇太后の周囲では褒められている。

「12月19日／１月１日　午前中クセニアが来て、このあり得ない話についてのみ語った。皆は喜び、光栄ある功績に対して祖国の名においてフェリックスを褒めちぎっている。

私はこのことが行われたことを恐ろしいと考える。今はフェリックスとドミトリーが責められている。しかし私は１つの意見だけを信じない。状態は不愉快である。基礎が足下からゆらいでいる。」

皇太后は、皇后と接触あるもの（ダッキー、ヴィクトリア・フョードロヴナ大公夫人）から、皇后は物事をゆがめてみるということを書き留めている。

「12月20日／１月２日　ダッキーは再びお茶に来て、世間についてあらゆることについて話をした。彼女はアリッキー〔アレクサンドラ皇后〕との最近の談話について話をした。彼女はすべてを非常にゆがめてみて、いつもの強情とわがままで、私たち皆を不幸の縁に連れて行くのである。」

クセニアの息子フョードルがドミトリー大公のメッセージを伝えてきた。

「12月21日／１月３日　フョードルがやってきた。ラスプーチン殺害に巻き込まれたが、関与していない。ドミトリー大公の言葉を伝えた。ドミトリーは私に対して次のように伝えることを求めた。彼女〔アレクサンドラ皇后〕が、彼をいかに扱ったかを決して忘れないと。彼は電話をかけて、彼女に会うことができないかどうか尋ねた。彼女は拒否し、彼のところにマクシィモヴィチ〔コンスタンティン・クラヴディエヴィチ、皇帝の侍従将官〕を派遣し、彼女の名前において監禁下にあると宣告させた。しかしこれを行う権利は彼女にはない。おそらく彼女は殺害への彼の関与を疑っているのであろう。馬鹿げた話である。」

ドミトリー大公のメッセージが淡々と事実が伝えられているが、この中に皇后に対する暗黙の批判が含まれていよう。ドミトリー大公のメッセージは、キエフの皇族を凍り付かせた。アレクサンドル・ミハイロヴィチ大公（サンドロ）は、叔父をキエフに逃れるよう手配した。他方フィリップの妻であり皇太后の孫であるイリーナとユスポフ家の両親も、キエフに来るように手配した。これが意味することは、皇后の怒りに任せた恣意から逃れるということである。キエフにいる皇太后の周辺のものが皇后の「復讐」におびえている様子が、きわめて詳細に如実に綴られている。

「12月22日／１月４日　サンドロは次のように電報を打った。自分の叔父を当地に送ることを予定し、もし彼が好都合と考えれば、イリーナと彼の両親も来ると言うこと。これが何を意味するべきなのかは、神のみぞ知る！」

翌日、首都にいたアレクサンドル・ミハイロヴィチ大公は、皇太后に対してニコライ２世に電報を打ち、事態を鎮静化することを要請する。ニコライ２世は当時ペトログラードに戻っていた。

「12月23日／１月５日　天気はひどい。サンドロからの電報が来た。彼は、私に対して私のニッキーに電報を打ち、彼がこの問題に蓋をするように助言することを求めた。横になる前に、ニッキーからの電報を受け取った。彼は私を安心させた。彼は事態を止めたと伝えたからである。神よ！」

皇帝は皇太后の電報に応じたようである。「捜査は直ちにとめられます。敬具。ニッキー」という返電が残されている[14)]。ただ、司法捜査は中断されたが、処罰がなされなかったわけではない。ロマノフ一族でありながら、ラスプーチン暗殺に関与したドミトリー大公は、自宅軟禁されていたが、懲罰のために首都から追放されペルシア戦線に派遣されることになった。しかも彼の父であるパーヴェル・アレクサンドロヴィチ大公を、ニコライ２世は引見することを拒否した。

「12月31日／１月13日　小さなマリアは早朝到着、不幸なパウリ〔パー

14）Coryne Hall, Op. Cit., p.277.

ヴェル・アレクサンドロヴィチ〕からの書簡を私に伝えた。彼は、息子が夜に突然ペルシアに送られた、それゆえに会うことができず、彼を祝福することもできなったので落ち込んでいる。いとわしい話。彼女の話のために私の毛が逆立った。パウリをニッキーは受け入れさえしなかった。なぜならば、彼女のために何も決定することができなかったからである。彼女はすべてを憎み、そして荒狂うことを夢想している。これらすべてはいかに終わるのであろうか？」

皇太后の視点によれば、全ては「彼女」（アレクサンドラ皇后）の差し金であるという判断である。年明けにはニコライ・ミハイロヴィチ大公がキエフの皇太后のところを訪問している。彼は12月31日、「反政府集団」に参加した咎のために首都を追放されて、自己の領地に戻る途上であった。

「1917年１月５日　昼食に戻ると、すぐにニコライが来た。彼はいつもより平静であるが、それにもかかわらず少し興奮している。昼食後、私たちは心が触れる別れをして、彼は自分の領地に去った。」

ニコライ・ミハイロヴィチ大公は、この訪問前に皇太后に対して次のように書簡で書いている。「催眠術師〔ラスプーチン〕を仕留めた後に、アレクサンドラ・フョードロヴナ、すなわち催眠をかけられたものの無害化に努める必要がある。ともかくも彼女をできるだけ遠くに送る必要がある。サナトリウムであれ、修道院であれ。問題になっているのは王権の救済である。…さらにそれからパーヴェル〔・アレクサンドロヴィチ大公〕、サンドロ、トレポフ〔アレクサンドル・フョードロヴィチ、首相〕、イグナティエフ〔パーヴェル・ニコラエヴィチ、宮内顧問〕、その他のものに話し、書いた。もっとも重要なことには触れなかった。なぜならば、全ロシアは次のことを知っているからである。ラスプーチンの終わりは、アレクサンドラ・フョードロヴナの最後を意味するということである。もし前者が撃たれれば、後者は追放されるべきである。まさにこのような代価を支払って全般的な沈静が可能となるのである[15)]」。皇太后もニコライ大公の見解に賛同していたに違いない。

15）Замуж за императора. Дневники жена Александра III, стр.419.　1916年12月17／24日付のニコライ・ミハイロヴィチ大公のマリア皇太后宛書簡。

「１月６／19日　首都は非常に不安な状況。主が私のニッキーの目を開けて、彼が彼女の恐るべき助言に従うことをやめれば。何という失望！これらすべては私たちを不幸へと向かわせる！」

首都の不穏な状況に言及しながら、皇太后は、現状における解決策は、ニコライ２世が、「彼女（アレクサンドラ皇后）の恐るべき助言」に耳を傾けるのをやめることと考えているのである。しかしニコライ２世にはこれができなかったことは、ニコライ・ミハイロヴィチ大公の以前の試みで示されていた。

さて、１月19日、皇太后はアレクサンドル・ミハイロヴィチ大公から首都に行くことを勧められる。皇帝に対する事態鎮静化の助言のためであろう。だが皇太后は自分の行動の効果のなさを考えたうえでためらう。「…これはおそらく何の役にも立たないであろう。これらすべての恐ろしい事件は、私を非常に不安にさせている！」とつぶやく。赤十字の事務を統括しているイリーンも、皇太后の首都行きに反対している。「１月26日／２月８日　10時半イリーンを引見。彼は私に対してペテルブルクに行かないように懇請した。そこの状況が恐るべきものであるから。彼は、大臣会議のすべてのメンバーが罷免されたことに我を忘れていた。」

２月２日には、クリミアで療養していたミハイル・アレクサンドロヴィチ大公が首都に行く途上、キエフに立ち寄った。彼は、皇帝が総司令部のあるモギリョフを長期にわたり不在にしていることに不満が高じていることを伝える目的があった。同日、アレクサンドル・ミハイロヴィチ大公は再び皇太后を首都行きに誘っているが、相変わらず皇太后は「しかし私はそこに行きたくない。なぜならばそこで私が何かをできると思わないからである。これは何と悩ましいことか！」と拒否している。

※２月革命

首都の状況は悪化するばかりであった。

「２月27日／３月12日　ペテルブルクからは非常に不安な知らせ。恐るべき。ニッキーが戻っていると言われている。これは重大なことに違いな

い。救いようがない！戦争の最中である。指導者が悪いのかそれとも顧問が悪いのか。これらすべては私たちをどこに連れていくのか。」

皇帝は、ペトログラードにおける混乱と広まったストライキ運動のために、開会したドゥーマを解散し、イヴァノフ（Иванов, Николай Юудвич）将軍に対して即座に秩序を回復するよう命じた。しかし２月27日、部隊は公然と反乱を始めて、政府の建物の奪取を始めた。皇帝は、総司令部のあるモギリョフから、この日朝早くに首都に帰還しようとした。

皇太后は、首都からの情報不足に苦しむ。また皇后が全てを掌握し、全ての問題の源泉であるという観点から次のような記述をする。

「２月28日／３月13日　ペテルブルクから全く何の知らせもない。非常に不愉快。イグナティエフ家が昼食に来た。彼もまた何も聞いていない。ドゥーマは閉鎖された。なぜかは明らかであるが、この問題は彼女〔アレクサンドラ皇后〕の掌中にあると言われている。この瞬間において、またぞろ恐ろしい誤り！このような責任を引き受けるとは、実際に気がふれなければならないであろう。」

首都を目指していた皇帝の列車は、混乱のために途中で止まらざるを得なかった。このあたりの状況も即時にキエフに伝えられている。

「３月２／15日　サンドロが正餐に来た。私のかわいそうなニッキーがプスコフにいると言われている。私は今、この悪夢の全貌についてだけ考え、話すことができる。クセニアから電報を受けた。その中で彼女は、ニッキーがどこにいるか誰も知らないと述べている。起きていることがおぞましい。主よ、私たちを助けたまえ。」

さらには、ニコライ２世の譲位の情報も同様に伝わっている。

「３月３／16日　９時15分にサンドロが、恐怖を呼び起こす知らせを持ってきた。ニッキーがミーシャのために譲位したようである。私は完全に失望した！このような悪夢に耐えるために、生きることにかいがあるのかどうか考える！彼［サンドロ］は、彼［ニッキー］のところに行くことを提案し、私はすぐに同意した。」

皇太后は譲位の知らせに絶望するが、しかしアレクサンドル・ミハイロヴィチ大公の要求に即座に応えてニコライ２世に会いに行くことを決意し

た。翌日昼の12時に皇太后一行はモギリョフに着いた。皇帝の列車はプスコフからモギリョフに引き返したのだ。

「３月４／17日　よく眠れず。もっとも寝台は快適であった。ものすごく大きな不安。12時にモギリョフの総司令部に着いた。恐るべき極寒と暴風。親愛なるニッキーは、駅で私を迎えた。悲しい再会！私たちは一緒に彼の家に向かった。そこで全員を伴う正餐が供された。…正餐後、かわいそうなニッキーは、２日間に起きたすべての悲劇的事件について話をした。はじめはロジャンコ〔ミハイル・ヴラディミロヴィチ、ドゥーマ議長〕からの電報が来た。その中において次のことが述べられていた。彼は、秩序を維持し革命を止めるために、ドゥーマとともに状況を自分の掌中に受け入れることになっている。そしてそれから、国を救うために、新しい政府を作ること、そしてニッキーに対して自分の息子のために譲位することを提案した。」

ニコライは、血友病のために健康に不安がある長男アレクセイに譲位をすることは不可能と考え、ミハイル大公に譲位することを自ら提案したのだ。

翌３月５日、皇太后はオリデンブルグスキー公爵や宮内大臣フレデリクス（Фредерикс, Владимир Борисович）から、ニコライを外国に亡命させるように示唆を受けた。皇太后はこれをニコライに伝えている。ニコライは慎重であったことが記録されている。３月７日、また同じような助言を皇太后は、アレクサンドル・ペトロヴィチ（Александр Петрович）大公とイギリスの駐在武官ウィリアムズ（Hanbury-Williams, John）から受けて、ニコライに伝えている。しかしツァールスコエ・セローにおいては、ニコライの子供たちがインフルエンザで臥せっているので、実行は困難と皇太后は考えている。

「３月７／20日　アレクサンドルが来た。ニッキーに対して、ツァールスコエ・セローから去るように懇願した。その後すぐにさらに遠くに行くようにと。病気の子供を連れて一緒に去るように。言うことはたやすい。何と厳しいことか！さらに神よ、助けたまえ！私は彼に対して、アレクサンドルとウィリアムズが、ツァールスコエ・セローから去ることを助言し

たと述べた。」

3月8日、ニコライはツァールスコエ・セローに移動することになった。「3月8／21日　本日は、私の人生で最も悲しい日！私は愛するニッキーと別れた。」翌日皇太后もモギリョフを発ち、10日にキエフに帰還している。そして短時間でキエフの町の様子がすっかり変わったことに驚き、あきれる。

「3月10／23日　金曜日　キエフに11時に着いた。全てはなんと変わったことか！駅には、誰もいず、プラットフォームには赤いリボンをつけた市民だけがいた。厭わしい！宮殿の上には、旗がなかった。ついに私のニッキーから電報を得た。彼はツァールスコエ・セローに着いた。彼は自分の家族と会うことを許されていないと言われている。ひどい卑劣漢！」

「赤いリボン」は臨時政府に対する忠誠を表すためにつけられている。そして宮殿の上には皇室の旗がなかった。

※クリミア

皇太后はクリミアに行く提案をアレクサンドル・ミハイロヴィチ大公から受けている。皇太后はこれを断った。皇太后の配偶者であるアレクサンドル3世の最後の厳しい日々を過ごしたのが、クリミアであり、皇太后にはそこは苦しい感情を思い出させる土地であること。さらには、息子のニコライの少しでも近くにいたいという願いのためであろう。そして皇太后は相変わらずキエフにおいて病院訪問を継続した。しかし、ある日、病院の門が閉ざされ、さらに主任の医師から、皇太后の存在は望ましくないとはっきりと告げられて、はじめてキエフから出発することに同意したという。この時期までに、キエフ地方ソヴィエトは、かつての皇族全員に対して町から出る必要があるという命令を出していた。

皇太后らは3月23日にキエフを発っている。随行したのは少数のものである。安全の名目で政府から同行者がつけられていた。

ところで、皇太后のクリミア滞在の日記は、1917年4月26日から始まっている。その日の記述は、ある意味クリミア滞在に特徴的なことを集中的

に表していた。午前５時から午後５時まで、アイトドルの皇太后邸において、セヴァストポーリ・ソヴィエトによる抜き打ちの捜索がおこなわれた。目的は秘密文書を明らかにするためと記されている。ニコライ２世の治世の問題点を洗い出すことがもくろまれたのであろう。それはともかく、起き抜けにいきなり侵入して来て、問答無用に捜査を始めた関係者に、皇太后は怒りをぶちまけた。皇太后はこの日を「私たちを恥辱で満たした日」として決して忘れないとする。

「私は彼らに対して不満をきつく表明した。確かに、私がまさに何を言ったのかを正確に私は覚えていない。私は我を忘れていたからである。将校が相当怒って『あなたは私を侮辱している』と述べたことだけを覚えている。これに対して私はきっぱりと答えた。『私があなたを侮辱しているのではなく、あなたが私を侮辱しているのです。』」

「彼が隣の部屋にいる間に、私の寝室は、多数の水兵で満たされた。帽子を取る暇もない程である。彼らは赤いリボンをつけ襟章に花をつけ歩きまわり、衝立越しに私を見ていた。私は凍えた。同時に私は怒りから汗が流れた。私が、最下等の犯罪者のように扱われたからであった。」

クリミアにおいて、皇太后は当初は娘たちとともにアイトドルの領地に居住した。そのほか、チャイルの領地には、ニコライ・ニコラエヴィチ大公たち、デュリベルの領地には、ピョートル・ニコラエヴィチ大公たち、コレイズには皇太后の孫イリーナと夫のユスポフ公爵が住んでいた。これらの領地すべては監視下にあった。監視部隊は72人で編成され、大部分は黒海艦隊の水兵と陸軍少尉補B.M.ジョルジャリアニ指揮下のヤルタ義勇隊の兵士からなる。

皇太后はこの監視の息苦しさに憤る。この件に関する記述は頻出するが、次のようなものが典型的である。

「７月17／30日　監視人からのどれほどの侮辱を、私は耐えるのであるか、それほどの不快を私におこなうのであるか！娘たちと少し庭を散歩した。昼食後すぐに医師が到着した。子供たちを診察するためである。しかし彼は診察を始めるや否や、あのムカつく下士官がやって来て、もっとも恥知らずなやり方で、医師の名前が日直当番のノートに記載されてないと

述べて、彼を追い出し始めた。この医師は非常に驚き、すぐに去ろうとしたが、クセニアの強烈な介入のために、とどまった。この医師が、ここにおいて私たちがいかに扱われているのかを見たことは、よいことである。」

「７月19日／８月１日　私たちは今や逮捕されたかのようである。誰もアイトドルの領地外に出ることができず、また誰も訪問することが許されない。恥辱！そして誰もなぜなのかを知らない。これは本当の卑劣さであり、彼らに権力があることを示すためだけのものである。」

このような抑圧的環境の中において皇太后の日記に頻出するのは「憂鬱」である。以下の引用に典型的に表れている。

「５月16／29日　よく眠れなかった。以前と同様に恐ろしい憂鬱に襲われた。それはおそらく、周囲のものに対しても、また私に対しても苦しいものである。それに加えて、サンドロはひどく暗い雰囲気であり、ずっと沈黙している。」

憂鬱にふさぎ込んでいるのは皇太后だけでなく、娘婿も同様である。そのような皇太后の慰めは、親しい者からの便りである。しかし戦争、革命という状況の中で便りが届かない。

「５月２／15日　私にとってなんとひどい打撃であるか。私の親愛なるものからの知らせがないのである。彼ら全員の手紙が、別れた状況における唯一の慰みとして今まで働き、私の単調で閉ざされた生活において激励を与えたのである！」

しかし困難な状況であっても、実姉の英国王太后やデンマークの親族からの書簡が人を介して届いたのである。

「６月30日／７月13日　午前中はいつものように娘たちと過ごした。その後グルズフからアプラクスィナが帰還した。筆舌に尽くしがたいほど嬉しいことに、私は、愛するアリックスから美しい書簡の束を、４ヶ月に渡る退屈な待機の後についに突然受領した。彼女から11通の書簡、そして、愛らしいヴァルデマーとクリスティアンから１通ずつ。知った筆跡を見て、私は自分が新しい生命に生まれ変わったと感じ、あたかも別人になったかのようである。この手紙を読むだろう数日における満足を予め先取りして感じた。」

さらには前年再婚した娘のオリガが男子を生んだ。このことは周りの雰囲気を明るくした。

「８月12／25日　私とアプラクスィナが正餐をとった。彼女が去ったとき、ジーナが来てベジクをした。突然部屋に私の素晴らしいコサック・ポリャコフが走って来て、私に対して孫の生誕を祝した！私は直ちに自分の車を呼んで、オリガのところに駆けつけた。クセニアは私よりも先に彼女のところに来ていた。私は大きな喜びを感じ、本当の楽しみを感じた。自分のベイビーを生んだオリガが非常に幸福であることを見たときに。このような素晴らしいことが起きたことに対して、主をたたえて感謝した！医師は遅れた。彼は、子供が世に現れた直後に来た。その代わりに産婆は、すべてを一人で処理したことにきわめて満足し誇りを感じていた。かわいそうなクリコフスキーは、これらすべての大きな動揺の後において自分をなくしていた。私たちは皆抱擁し、互いに感謝した。」

ところで、モギリョフで別れたのちに、離れ離れとなったニコライ２世たちの消息が気になるが、なかなか手に入らない。８月７日、ペテルブルクから帰還した孫のイリーナからの情報を得ている。「ニッキー一家」はツァールスコエ・セローからトボリスクに移されると聞いて、皇太后は心臓発作を起こしそうな衝撃を受ける。ただし、その中でも期待できるのは、トボリスクではツァールスコエ・セローよりも安全であるということだ。しかし臨時政府が初めはリヴァディアに行かせると約束して、うそをついたということを捉えて、「ニッキー一家」が良心的に扱われていないと書いている。このように相当正確な情報が伝わっている。その二日後「ニッキー一家」のトボリスク移転に関する公式発表に関して日記に記されている。皇太后はすでにその事実を知っていたのだが怒ってしまう。８月26日は、オリガに対して子供が生まれたことに関してトボリスクから電報が届く。しかしそこにはニッキーの署名はなかった。またニコライ２世から皇太后宛に直接書簡も届いた。1917年には３か所、皇太后の日記に書簡受領の記述がある。３通届いたのであろう。10月２日、10月17日、11月17日である。記述内容が具体的な最初の記述を引用する。

「10月２／15日　金曜日　ものすごく喜んだことに、トボリスクにいる

私の愛するニッキーからの書簡を受領した。彼は、彼らがそこでいかに生活をしているのかを記述している。彼らは庭にだけ出ることが許されている。そこで彼らは、時間を過ごすために、あらゆる遊びを行っている。そこからは山や森に対する素晴らしい光景が開け、それは彼らにとってはとても魅力的である。恐るべき生活とものすごく大きな不公正！」

アイトドルの警備状況は、外部の状況に応じて変化する。例えば次のような記述がある。

「８月29日／９月11日　ポリャコフが来て、アイトドルが閉鎖されると知らせた。皆に対して入口と出口が閉ざされる。セヴァストポーリにおいて私たちを貶め辱めるために考えられた、また一つのニュースである。これがいかに不愉快であったとてしても、私たちは実際のところこの卑劣漢により逮捕されているのであるから、何のため？」

警備強化の理由を皇后は自問しているが、その日の続きの記述の中に答えを見つけることができよう。「コルニーロフ事件」が起きていたのである。

「状況は益々悪化している。コルニーロフ将軍はケレンスキーに対して権力を捨てて新しい政府を編成することを提案したという。しかしケレンスキーは、当然であるが拒否し、コルニーロフを解任し、ある種の宣言を出した。そこにおいては、コルニーロフは裏切り者で暴徒として宣言されている。」

ロシア軍総司令官に任命されたコルニーロフ（Корнилов, Лавр Георгиевич）将軍が軍を伴い首都を目指していた。それに対してケレンスキー（Керенский, Александр Федорович）首相が彼を解任した。しかしコルニーロフは進軍を継続したが、率いた軍が解体したために首都における戦闘は避けられた。皇太后はコルニーロフに同情的な記述を残している。

「８月30日／９月12日　コルニーロフは文書に調印し、その中において次のことを率直に述べている。すなわち、ケレンスキーはうそつきであり、国を破産に向かわせ、ドイツ参謀本部の直接の指示に従い活動をしていると。すべての大臣は辞職した。」

「９月１／14日　この卑劣なケレンスキーは、自らを総司令官に任命し、他方アレクセーエフ将軍を参謀長に任命した。これは明らかな裏切り！彼はコルニーロフ将軍と彼のスタッフをすべて逮捕した。日ごとに状況は益々悪化していく。」

首都の混乱は継続した。ボリシェヴィキ政権奪取の報が届いている。

「10月27日／11月９日　噂は裏書された。ボリシェヴィキが政府を倒し、逮捕した。それゆえにすべての権力は今や彼らのもとにある。14人のボリシェヴィキが選ばれた。その中には、レーニン、ジノヴィエフ、トロツキーなどがいる。彼らはみな偽名のユダヤ人である。私たちは、書簡も、新聞も受け取れない。レーニンをドイツは封印列車でロシアに運んだ。なんという卑劣、なんという輝かしい見世物を彼らは演じるのか、このろくでなし…」

ボリシェヴィキに対する反感に加えて、外部世界から情報が取れないことを皇太后は嘆く。11月４日、皇太后は、派遣されているコミサール・ヴェルシニン（Вершинин）と領地を監視しているジョルジェリアニと談話をおこない、首都の模様を聞いている。その中で冬宮が破壊された様子がわかる。皇太后は絶望する。「現在の瞬間には、いかなる政府も思い浮かばない。私たちは、荒れ狂う海を舵や帆なしで航行している船に似ている」と。

また皇太后の側近が、ドイツ軍が進軍してクリミアに秩序を打ち立てる可能性に言及して、彼女のドイツ嫌いを引き起こし、怒らせてしまう。

「11月９／13日　その後アプラクスィナがシェルヴァシゼを連れて現れて、当地に秩序をもたらすために、すぐにドイツ人が来ることが予期されると述べて、私をイラつかせた。彼らは、あらゆる手段でカイザー・ヴィルヘルムをほめそやし、最後には私を怒らせた。これは私の弱っている心臓には非常に悪いのである。」

皇太后は日記には物資の欠乏に関して、実際あったはずなのであるが、めったに記述しないが、この時期には次のような記載がある。

「11月11／24日　バターとお茶は私たちにはもはや供給されない。バターとして売られているものは、食べられない。幸いなことに、私のとこ

ろには当面少しの良質のお茶が残っていた。砂糖もまたきわめて節約せざるを得ない。…言われるところによれば、ヤルタにはクリミア連隊から騎兵中隊がやって来た。これには住民が皆喜んだ。私たちを当地で監視しているジョルジェリアニは、彼ら〔騎兵中隊〕と水兵との間に誤解が起きるかもしれないと考えていて、私たちの警備を強化することを必要としている。」

物資の欠乏だけでなく、秩序の混乱に伴う派兵が新たなトラブルを巻き起こす可能性が示唆される。さらにヤルタが外部世界から切り離されたために親しい者の便りが届かなくなり、皇太后はまた困惑を深める。

「11月13／26日　私は、少しでも可能性があるときは、アリックス、テューラ、ヴァルデマーに対して書簡を書いている。しかし誰からもいかなる葉書も受け取れない。これがどれほど私を抑圧しているか、これはまことにもって真の試練である。」

最後にボリシェヴィキがドイツとの単独講和をはじめ、その混乱に関する記事を皇太后は読み、怒りがマックスに達する。

「11月19日／12月２日　完全な混沌。全く憤激。この状況は許容できない。…それからすべての子供が私の所でお茶のために集まり、新聞を読んだ。世界では、何かしらあり得ないことが起きている。今この卑劣漢たちは、ドイツと単独講和を締結しようと努め、連合国に対して12月６／19日に返事をするようにとの要求のついた通牒を発出した。トロツキー、クルィレンコの一党は、ドゥホーニン将軍の全権を否定している。もっとも陸軍は彼を支持し、今までのところ［総司令官としての］クルィレンコを認めていない。完全な混沌、まったく憤激、このような状況をどうして許容することができるか?! すべてはあべこべに解されているからである。」

※1918年

1918年の皇太后の日記は６月６日から始まる。この間、アイトドルの領地を警備しているコミサールの交替があった。前年12月に、ジョルジェリアニは、ザドロジュヌィ（Задорожный）に取って代わられたのだ。

前者は、皇太后に対して丁寧な言葉遣いをしていた。さらに、皇太后を水雷艇でヤルタからセヴァストポーリに連行するという試みがあったが、皇太后の健康にとって危険であるという理由でジョルジェリアニが反対したことなど、皇太后はともかくも、そのお付きのものからはある種の信頼を得ていた。これに対して、ザドロジュヌィは皇太后らに対して疎遠な態度をとっていた。

このザドロジュヌィから、皇太后らは、アイトドルからデュリベルに移ることを求められる。デュリベルにはもともとピョートル・ニコラエヴィチ大公が居住していたが、クリミアにおけるロマノフ一族が集められた。移動は２月26日と指定された。移動の理由はロマノフ一族を保護するためであった。なぜならば、そこの館は三方が高い壁に囲まれていて、四番目の側は、海へと降りてゆく崖であったからである。

このデュリベルが、４月９日から15日かけて、戦乱に巻き込まれる。ヤルタから別系統の派遣隊が到来し、デュリベル領地に入ろうとしたのである。ザドロジュヌィは、何人であれ領地に入ることを拒否した。さらに人数不足のために皇族も警備に就くことが求められた。寝ずの番が続いた後にようやく15日、派遣隊はヤルタに引き返した。その後デュリベルにはドイツ人将校も現れた。

皇太后のお付きのメングデンは次のように記している。

「４月21日　夜は復活祭のお勤めが行われた。それには、この機会に私たちのところに来た、多くの隣人が参加した。その後、ニコライ〔・ニコラエヴィチ〕大公のところで復活祭を祝した。復活祭の食事を作るために、種々の人々からの援助を受けた。しかしそれにも関わらず正餐は極めて質素。テーブルに着いた賓客の中には、ザドロジュヌィもいた。私たちの救済者であり、ついに公然と精神構造と本質を示すことができたのだ。…ドイツ人は、皇太后とニコライ大公に対して完全な移動の自由を提起した。しかし彼らはこの許可を利用することを望まなかった。デュリベルにおける生活は、今や非常に変化した。隣接する領地の主人が私たちにあいさつに来て、私たちは同じことをしているのである。堤防が決壊したとい

う感じが現れた。そして私たちは自由を楽しむことができる[16)]」。

ドイツ軍提示の自由の享受を拒否することは、ドイツ嫌いの皇太后のプライドの問題に過ぎない。自由を否定するわけではない。さらにこのころ、白軍に属する将校の一団が来た。彼らは、水兵に代わり、皇太后らの警備を引き受けた。白軍将校たちは内部に配置され、他方ドイツ人警備隊は外部に配置された。すなわち皇太后のドイツ嫌いとは裏腹に、ドイツ軍と白軍による治安維持が形成されたのだ。

事態が鎮静化したのちに皇太后らは海沿いのハラクス領地に住居を移すことになる。そして中休みが到来したのだ。それを反映してこの年の皇太后の日記記述の基調は穏やかなものである。ドゥボヴァヤの森へのピクニック（６月23日）、ミスホルの海辺への散歩（６月27日）、ペチューシャ〔ピョートル・ニコラエヴィチ大公〕の誕生日にデュリベルに行く（６月29日）など、自由を満喫している。７月３日に、皇太后はドイツ人将校を通じて妹のテューラ（ハノーファー王太子エルンスト・アウグスト２世妃）からの書簡を受け取っているが、即座に彼女に対して、「私たちは全く素晴らしい状態で、丸一年幽閉で過ごしたのちに、自由です」と返信している。

上で引用したメングデン日記の一部に示されていたように、コミサール・ザドロジュヌィは皇太后たちの救済者として復活祭にも招かれていた。彼が皇太后を救ったと言っても過言ではない。ザドロジュヌィはこのあたりの事情をのちに皇太后にあけすけに語っている。

「９月19日／10月２日　水曜日　非常に早く起きた。その後オリガが来て、突然彼女に続いてザドロジュヌィ。私は、彼と再び会えたことが非常にうれしい。私たちが冬の間耐えてきたすべてのことについて、彼と長く話をした。私は、初めは彼のことを嫌な人で、本当の刑吏であると考えたと述べた。彼は笑い出して、次のように答えた。彼はそのようであるかの様子をせざるを得なかった。そうでなければ彼は追放され、もっとも悪い

16）Зинаида Менгден, Воспоминания графини Зинаиды Менгден, переданное в разговоры, стр.195.　1943年に公刊されたジナイダ・メングデンの回想録（デンマーク語）の露訳。以下のサイトを参照のこと。http://dagmaria.dk/mobile/index.html

ものにとって代わられたであろうと。彼は私を見つめる決心がなかった。私が殺される予定であると知っていたからであった。彼には非常に心痛であった。これは何と感動的なことであるか！またぞろ彼にすべてを感謝することができて、私は非常にうれしかった。」

さてニコライ２世たちも1918年４月に、身柄をトボリスクからエカテリンブルクに移される（４月13日発、17日着）。これに関しては、７月14日、皇太后はトルスタヤ女史の書簡で初めて知った。「彼女は、私のかわいそうな天使ニッキーの生活の悲惨な細部を知らせている。小さなアレクセイがひどい病気であるとき、両親はトボリスクから追放されたようである。前代未聞の苛烈さ。殺人的である。」トボリスクからの出発前後、ニコライの息子アレクセイは鼠径部の痛みで寝込んでいた。それゆえにエカテリンブルクに出発したのはニコライ、アレクサンドラ、三女のマリアだけであった。残りの子供たちは５月10日、エカテリンブルクに合流している。

７月17日には、トルスタヤ女史の書簡を運んだ人物が皇太后に会い、その人物がエカテリンブルクにおけるニコライ一家が収容されている様子を述べていることが記録されている。

「家は、二つの方向から高い壁により囲まれ、このために何も見ることができない。彼らにはほとんど全く食べ物がない。彼らを王党派が助けるであろう、５本の牛乳やその他の食料品を届けている。デレヴェンコ医師、かわいそうなドルゴルコフとイリーン、ナステニカ・ゲンドリコヴァ、シュネイデルが、多くの従僕と同様に拘留されている。最大限の卑劣！」

そして７月17日、ニコライ一家は、エカテリンブルクのこの建物で家族全員とともに処刑される。皇太后の日記において、ニコライの死に関する記述が出るのは７月21日が最初である。「私たちの愛するニッキーの運命に関する恐ろしい噂が広まっている。それを信じることもできないし、欲しもしない。」

ここに示されているように、皇太后はニコライの死の情報を信じようとしない。日記を見れば、皇太后には、ニッキーが解放された、あるいは生

存しているという様々な情報が寄せられ、皇太后をそれにすがる。例えば次のようなものである。

「８月24日／９月６日　彼〔ケルレル将軍〕の話を聞くことは、尋常ではなく興味深い。彼は、ある将校と話をした。その将校はドルゴルコフ公爵と会い、そしてドルゴルコフは彼に対して、自分の部下がニッキーを解放して、彼らを軍艦に乗せて安全な場所に運んだことを伝えた。これは本当であろうか？神よ！」

ドルゴルコフ（Долгоруков, Василий Александрович）公爵は、ニコライ２世にエカテリンブルクまで付き従ったが、ニコライらと引き離されていわゆるイパチェフ館には入れず、別途収監され処刑された。旧露軍将軍の伝えたことは明白なフェイクニュースである。

これに対してニッキーの死を前提としているものは、それが親しい者であっても皇太后の心を傷つける。

「９月26日／10月９日　親愛なるクリスチャン（デンマーク国王クリスチャン10世）からの書簡がもたらされた。それは私の心を深く傷つけた。彼らは皆、私のニッキーに関する恐ろしい噂を真実であると信じているのだ！」

※ロシア出国へ

1918年秋のころから、皇太后にクリミアから去るようにという声が日記に記録され始める。

９月10日、皇太后は親しい軍人カズナコフからドイツの状況が悪いので、それに伴う混乱を見越して退去を勧められたのであるが、皇太后は混乱するばかりである。皇太后によれば「神の指示」がまだ見えないからである。ドイツ皇帝の退位という噂が乱れ飛ぶ中で、10月27日、同じ軍人は、ルーマニア王妃（ミッスィ）からの書簡をもたらす。皇太后を外国に去るよう促すものであった。皇太后はそれを拒否する。

「10月28日／11月10日　夢を見た。私たち皆が、私たちをここから運ぶ船にすでに乗っていたようであった。クセニアは、教会のお勤めの前に来

て、ニコラーシャとスタナ〔ニコライ・ニコラエヴィチ大公夫人〕は私の見解に賛成していると話して、私をなだめた。当然、私は、カズナコフの善良な意図とミッスィが表した配慮にとても感動している。しかし、大きな変化をもたらすであろう、休戦のとば口に今私たちがいるとき、これは必要ないのである。」

実際にクリミアを占領していたドイツの撤退が現実化する。

「10月31日／11月13日　ドイツ人将校バルトリドが電話、そして、クリミアから去る命令を受けたと伝えた。おそらく私たちは同盟国が来るまで運命の恣意に任されるのである。…サンドロは私の家に来て、茶を喫した。彼はまだ何かを言いたいようだと私には思えた。彼は私に対してアリックスに電報を打ち、私たちが一時的に昨年と同じような状態にいるということを彼らに知らせるように求めた。私は彼にテキストを渡した。」

ドイツの撤退に際して、皇太后は同盟国の到来まで自己の運命は恣意にゆだねられると観念する。これに対して娘婿アレクサンドル・ミハイロヴィチ大公は、イギリス王太后に助けを求めるよう訴え、認められたのであった。なおドイツ撤退ののちに、11月３日に、白軍の将校５人が皇太后邸の警備についている。

そして11月７日、皇太后の前にイギリスの海軍将校が現れて、英国王ジョージ５世の名前において皇太后を軍艦に迎えると述べた。

「私はとても感動していると述べ、感謝した。しかし彼に対して、私の言葉を理解しているのかと尋ねた。私は彼に対して次のように説明した。いかなる危険も当地においては私にはもはやなく、私はこのように逃げることを自分に許すことは決してできないのであると。」

皇太后は喜んだが、イギリスの申し出をかたくなに拒否した。その理由には合理的根拠がなかった。「いかなる危険も当地においては私にはもはやない」などとは決して言えないはずであった。もっとも皇太后はイギリスに対する好意は変わらず、イギリス艦の動きを見ている。

「11月９／22日　イギリスの駆逐艦は、午前中ずっと、沿岸に沿って前後に移動して、私の目を楽しませた。イギリス軍艦の操練を観察することができて何と素晴らしいことか。これだけで皆をして彼ら〔イギリス人〕

を尊敬させるのである。別の軍艦は昨夜コンスタンチノープルに去った。」

さらに、11月12日、イギリス人大佐ボイルが来て、ルーマニア王妃からルーマニアに発つようにとのメッセージを再度伝えた。しかし皇太后はかたくなに拒否する。11月15日、ジョージ５世の提案を伝えるために、キャプテン・ロイズが皇太后を訪問する。これも皇太后はこれを拒否する。

「12時に、ケンテルベリ艦長、キャプテン・ロイズが来た。私は彼と再び会うことが非常にうれしい。彼はジョージの親切な提案を繰り返し、私に対してローマに来るようにとのイタリア国王の招待を伝えた。これらすべては彼らからすれば極めて親切である。しかし彼らは、自己の提案により私を死ぬほど苦しめているのである。今は私はこれらすべてについて考えざるを得ない。しかし主の意思を信頼しながら。彼は、私に対して何を企てるべきかを確実に示すのである。」

皇太后の安全の足元が明白に崩れだす。12月３日、白軍の指導者ドラゴミロフ（Драгомиров, Владимир Михайлович）から、皇太后は、当地から去る方がよいという書簡を受けて衝撃を受ける。「12時にソーニャが夫と来た。彼は私に自己の書簡を読み始めた。私は彼に対して、ドラゴミロフに手紙を書くように求めていた。当地における私の滞在により、軍は当惑しているのかどうか、彼らは私に対して保証を与えることができるかどうかを知るためである。返事には、私が去った方がよいと述べられていた。これは私には重大な打撃であった。彼は、際限なく忠実な人間であり、私が頼ることができる人物であり、私を魂の底まで揺さぶった。」

12月11日、さらにイギリスのアレクサンドラ王太后からの電報を受け取る。皇太后の心は動くが、やはり拒否する。「彼女は、私が彼女のところに移るようにまたぞろ主張している！これは何と痛く苦しいことか。なぜならば私はとても喜んで彼女のところに行くのだが。しかしそれは今ではないのである。彼女に対してすべてのことを書いた。自分の感情を説明しようと努めた。」

すでに、事態の悪化のために、アレクサンドル・ミハイロヴィチ大公は子供を連れてクリミアを去った（12月13日）。もっとも彼の妻のクセニアはとどまる。次女のオリガもクリミアを去り、カフカスに向かう意向であ

り、1919年初頭には出立した。

このような状況において、皇太后は何にこだわってクリミア出発を拒否していたのか。息子のニコライ一家の生存を信じて、近いところにとどまることを望んだとしか考えられない。

出国を拒否する皇太后が折れたのは、1919年４月であった。英艦マールボロのチャールズ・ジョンソン大佐が、状況の悪化を粘り強く説いて皇太后を説得した。この時ドイツに代わってクリミアに入ったフランスも撤収し、ボリシェヴィキのクリミア進軍が予期された。４月11日、皇太后一行を乗せたマールボロはヤルタを出港した。その後皇太后はイギリスとデンマークで亡命者として余生を過ごすことになる（1928年没）。

※結びに代えて

マリア皇太后の日記は、基本的には日常の身の回りのことを綴った非政治的な内容が大半である。それにも関わらずその政治的側面に注意を向ければ、この期間において、皇太后が真正面から行動したのは、1915年におけるニコライ２世の軍総司令官就任に反対したことだけであると断言できよう。大戦の推移がロシアにとって不調であるときに、ニコライ２世がこのようなリスクを冒すことがロシアのため帝室のために賢明ではないこと。就任決定の背後にアレクサンドラ皇后、さらにはラスプーチンの影響力が見えると捉えられるということが主たる反対理由であった。これは妥当な判断である。しかしニコライ２世は、皇太后の助言を容れずに司令官に就任した。こののち皇太后は政治的な動きを求められてもかたくなに拒んでいる。

1916年に皇太后が首都からキエフに移住したのは、何か積極的な政治的な理由があるわけではなく、赤十字活動や娘の活動支援のためであり、またラスプーチンなどの噂が流れる首都の生活を嫌ったためと思われる。

1916年秋に、大公たち、とりわけニコライ・ミハイロヴィチ大公が、ニコライ２世に対して、アレクサンドラ皇后の政治介入をやめさせ、ドゥーマの信頼を得た政府を作るよう諫言した時、皇太后は彼らの行動を支持し

て期待を寄せはしたが、自らは積極的に動かなかった。

その後ラスプーチン殺害の混乱の中、大公たちから、皇太后自ら首都に向かい、皇帝を説き伏せるよう期待されたが、皇太后は辞退した。自らの行為の無益さを理解していたこと、ニコライを直接的に苦しませる行為をすることは自ら感情的に耐えられないことなどが理由と考えられるであろう。

この時期の皇太后の動きに、すでに述べた以上の政治的な意義を認めるということは、日記を見る限りにおいては、あまり妥当とは言えないであろう。ユスポフ公爵が伝えているところの、ニコライ２世に対して「私かラスプーチンを選びなさい。ラスプーチンが退けられないのであれば、私はペトログラードを去ります」と皇太后が面罵したという記述が、皇太后の政治的意思の表れであると引き合いに出されることがある。しかしながらこれは、皇太后が唯一明示的に政治的行動をした、すなわちニコライ２世の総司令官就任反対したことに関係しているものであり、なんとしてもラスプーチンを排除するという強い意向を表しているのではないと推測できる。

さらに、革命前においてニコライ２世を退位させて、ミハイル大公に摂政を務めさせる運動に皇太后が関与していたとささやかれることがあるが、日記の中をつらぬいている皇太后の思想と行動とはそぐわないものであり、関係者の皇太后に寄せる期待の表れにすぎないと考える方が適切であろう[17)]。

17）Coryne Hall, Op. Cit., p.267.